

クォーター制(4学期制)の課題に関する一考察

—学生アンケート調査からの示唆—

A Critical Study of the Problems of the Quarter System: Implications Based on a Students' Survey

岡 達 哉
Tatsuya Oka
川 澄 厚 志
Atsushi Kawasumi
上ノ山 賢 一
Kenichi Kaminoyama
張 森
Miao Zhang
河 合 正 二
Shoji Kawai
曾 我 千 春
Chiharu Soga

1. クォーター制の導入をめぐる経緯と趣旨

(1) クォーター制導入の潮流

米国では1960年代初頭に多くの大学でクォーター制が導入された一方、近年では、例えばオハイオ州大学システムの「高等教育のための戦略計画」(University System of Ohio's Strategic Plan for Higher Education)に従って同州のすべての公立大学がクォーター制からセメスター制に回帰するなど、クォーター制、セメスター制の採用は「時代の要請とトレンドに影響されている」(the use of a quarter or a semester calendar system is driven by the demands and trends of a particular period of time)¹といわれている。

日本の一部の大学でも近年、クォーター制の導入機運が高まっている。文部科学省大学振興課大学改革推進室が株式会社ベネッセコーポレーションに委託して実施した調査によれば、学年暦において2学期制をとると回答した大学が91.4%を占めた一方、4学期制をとると回答した大学は1.0%(5大学)にとどまった²ものの、早稲田大学などすでに導入されている5大学のほか、14大学が導入を予定している(平成26年2月現在)とされる³。

日本におけるクォーター制を含めた学事暦の検討、見直しに関する主要な経緯については仲井(2016)が以下のよう整理している⁴。

2008年12月：中教審「学士力答申」

2011年4月：東大「入学時期の在り方に関する懇談会」設置(2012年3月に報告書)

2011年8月：中教審大学教育部会で学年歴問題が議論(～2012年12月)

2012年8月：中教審「質的転換答申」

2013年4月：大学設置基準第23条改正

2013年4月：早稲田大学クォーター制導入

2013年10月：「学事暦の多様化とギャップタームに関する検討会議」(～2014年4月)

2015年4月：東大クォーター制導入

(2) クォーター制導入の趣旨

日本の大学の授業が主に採用しているセメスター制のもとでは、1年を前期・後期の二つに大別した上で15週ないし16週にわたり週1回ずつ授業が行われるのに対し、クォーター制(4学期制)では通常、「1年を4学期に分割して授業を開講し、1つのクォーターを8週間とし、同じ科

1 University of Cincinnati (2012) p.2.

2 文部科学省 (2014a)

3 同

4 仲井 (2016) p.3.

目を週2回実施する」⁵こととなる。

すでに導入している大学の事例を参考とすれば、クォーター制の導入により期待されるメリットとして以下の5点が想定される⁶。

- ① 集中的に学ぶ機会が増える
週2回開講する科目では、集中的に学ぶことができるため、学習内容が定着しやすくなる。
- ② 柔軟な履修計画が可能になる
履修登録の機会が2回から4回（変更期間を含む）になることで、履修の選択肢が広がり、履修計画の柔軟な組立てが可能になる。
- ③ 留学のチャンスが広がる
学期と休業期間を組み合わせるなど工夫調整することで、サマースクールや短期留学などへの参加がしやすくなる。
- ④ 帰国後の履修がスムーズになる
各学期が終了するまでのタイミングで帰国すれば、次学期からの履修が可能になり、期間をあけずに授業を受けることが可能になる。
- ⑤ インターンシップやボランティア活動などに参加しやすくなる
学期と休業期間を組み合わせるなど工夫調整することで、インターンシップやボランティア活動といった自主的な学修の選択肢が広がる。

(3) 本学の現状

金沢星稜大学（以下「本学」）では、平成28（2016）年度から人文学部、教養教育部でクォーター制（4学期制）に移行した⁷。平成28（2016）年4月に新たに設置された人文学部では、「海外留学による異文化体験を通じて、海外の社会や人々の生活について理解を深める」⁸ことを「教育課程の編成及び実施に関する方針（カリキュラム・ポリシー）」に定めており、そのため「1科目1週2コマによる集中度の高い授業の実現と、海外の大学のタームに合わせて海外留学しやすい環境を提供する」⁹ことを目的としてクォーター制を実施することとされた。人文学部の専門科

目のみならず、人文学部の学生が履修する共通教育科目についてもクォーター制の対象とされたことに伴い、経済学部の学生が履修する「総合教育科目」（共通教育科目）についても必然的にクォーター制により開講されている状況にある。

2. クォーター制の課題

日本の大学教育におけるクォーター制の導入に期待されるメリットについては、前述のとおりセメスター制から移行した諸大学でも言及しているところであるが、クォーター制がもたらす直接的ないし間接的なデメリットについては、履修登録と成績評定に関する負担（後述）を除き、明示的な議論がなされているとは言い難い状況にある。

米国の Southeastern Community College では、1980年代にクォーター制からセメスター制に移行するに当たり、クォーター制がもたらす弊害の一つとして、履修登録（registration）、期末試験（final examinations）、評定（grade reporting）、教育プログラムの企画（program planning）に係る過剰な時間、金銭、努力（excessive expenditures of time, money, and effort）が指摘されている¹⁰。

そもそも日米の高等教育システムは様々な点で相違しており、クォーター制がもたらすメリット、デメリットについて議論を単純化することは不適當であるが、一般的に、制度設計におけるコストの視点の重要性について異論はないであろう。上記事例で指摘されているような「コスト」と同様の内容が、日本の大学におけるクォーター制の導入又は移行においても「過剰」（excessive）といえるようなレベルにあるかどうかは、厳密性を追求するならば教育の費用便益分析（cost-benefit analysis: CBA）等の手法を通じ、クォーター制がもたらすメリットとの比較衡量を行うことによって決定されるべきものである。厳密な分析は本稿の射程外であるが、教育の費用便益分析においては教職員、学生双方の社会的、私的な機会費用（opportunity costs）についても推計が求められる（Woodhall（2004）：

5 王（2016）p.101.

6 ここでは大阪大学の例を参考として整理した。ちなみに大阪大学では上記5点について「4学期制の導入により、“変わる”ことが期待されること」との表現を用いており、「メリット」とは呼んでいない。なお、南山大学も「クォーター制を導入する主な目的」としてほぼ同様の趣旨を指摘しているが、同大学では③と⑤の内容を併せ、短期留学や自主的な学修の選択肢が拡がることとして目的を4種類に整理している。本学では留学制度とインターンシップ等の学修活動では運用面で違いがあることを踏まえれば、本稿ではこれらを区別することに合理性があるものと思料する。

7 金沢星稜大学（2017）p.59.

8 金沢星稜大学人文学部HP.

9 金沢星稜大学（2017）p.5.

10 Maynard（1984）p.8.

30) とされる。これを踏まえたうえで、クォーター制のデメリットもしくはコストに関連して学生にどのような負担が帰属することとなるのかを見極めつつ、必要に応じて学生の視点に立った負担調整的な仕組みを設ける、授業の運営方法を制度的に改善するといった方法を通じ、教育上期待されるメリットを遺憾なく発揮することを目指す建設的な議論の一助として、学生に対するアンケート調査を実施した。調査の概要及びその分析、考察について次節以降で述べる。

3. 学生アンケート調査：クォーター制に対する学生の認識

(1) 調査の概要

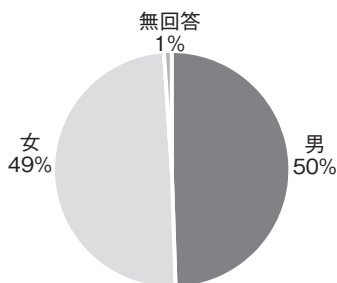
前項の問題意識に立脚した議論の契機とするため、本稿執筆メンバーにより構成されるFD (Faculty Development) 分科会の活動の一環として学生を対象とするアンケート調査を実施した。調査項目については学生に対するインタビュー調査を事前に試行した上で、当該FDで検討、決定した。

- 対象：本学経済学部3年生（429名）
- クォーター制科目について、「語学系科目」と「語学系以外の科目」の2つのカテゴリーごとに設問を設定（リッカートの5段階評価）。あわせてクォーター制に対する自由意見を記入するための自由記述欄を設定
- 送付・回収：Google フォームを利用。入力用URLに加え、経済学部長名による協力依頼文を記載したメールを対象学生に配信
- 実施時期：2018年1月31日（水）～2月9日（金）
- 有効回答数：95（回収率：22.1%）

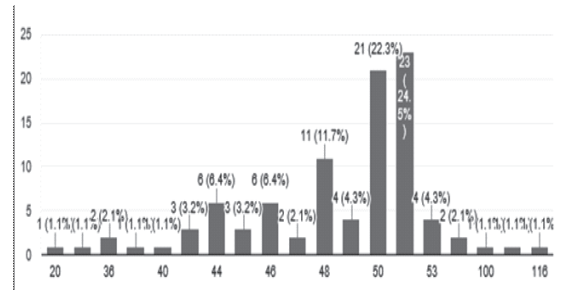
(2) 調査結果

1) 回答者の属性

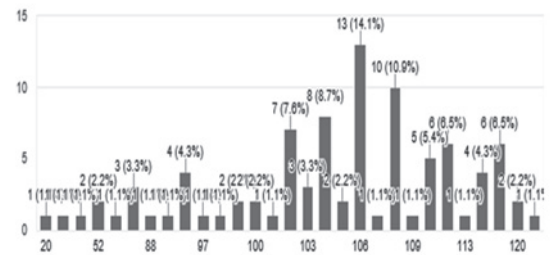
①性別（N=94）



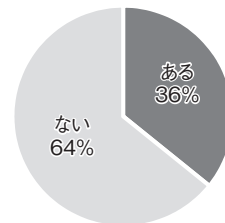
②総合科目（共通教育科目）の取得済み単位数（N=94）



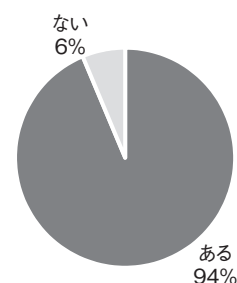
③取得済み単位数の総合計（N=92）



④クォーター科目の履修経験（語学系科目）（N=95）



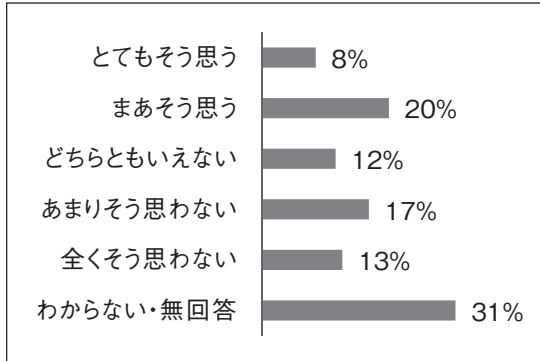
⑤クォーター科目の履修経験（語学系以外の科目）（N=95）



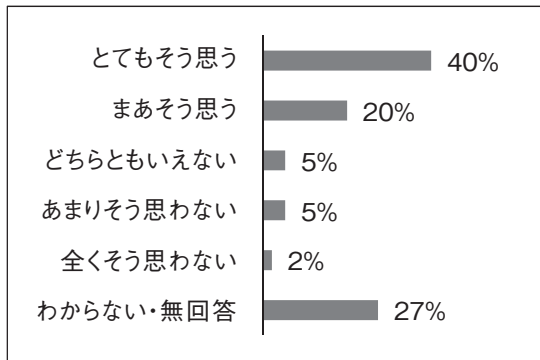
2) クォーター制について (5段階評価)

【語学系科目】

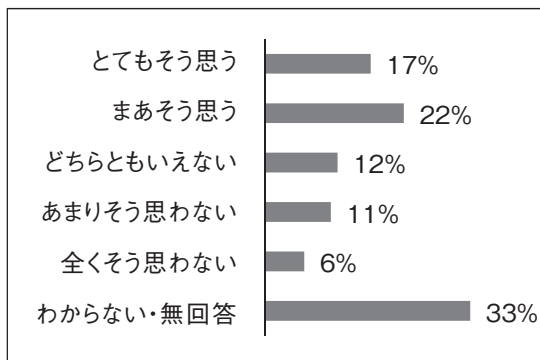
①試験時期がセメスター科目と分散されるので試験勉強がしやすい (N=92)



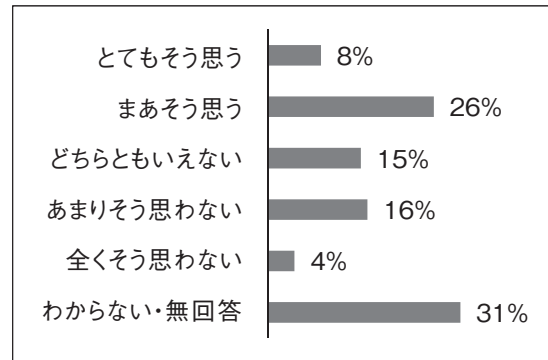
②時間割で同じ曜限に入っている専門科目を履修できない (N=92)



③欠席するとついていけないため、病気や公欠等やむを得ない欠席の際に困る (N=92)

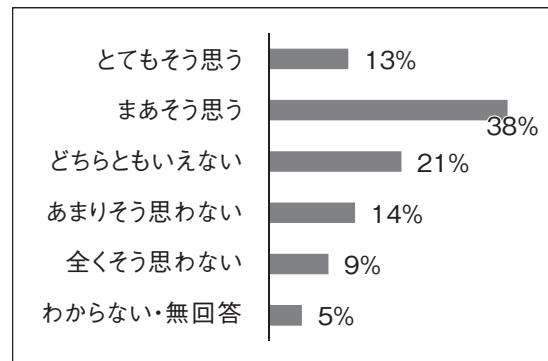


④短期間に詰め込むため知識が身につみにくい (N=93)

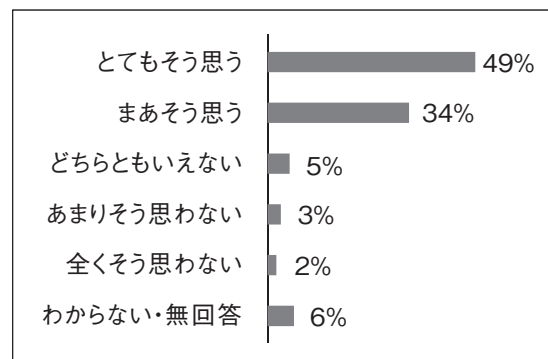


【語学系以外の科目】

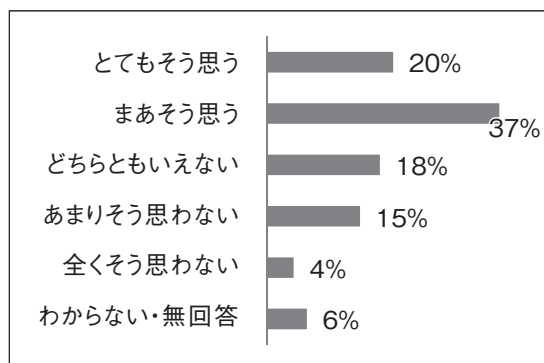
①試験時期がセメスター科目と分散されるので試験勉強がしやすい (N=95)



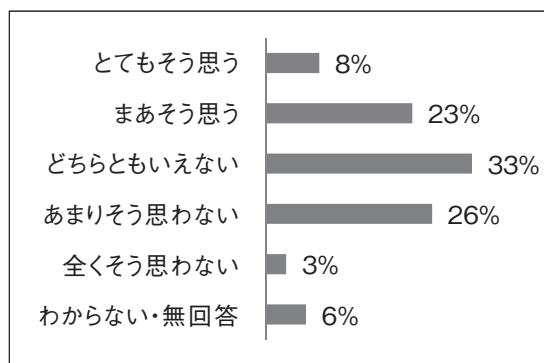
②時間割で同じ曜限に入っている専門科目を履修できない (N=93)



③欠席するとついていけないため、病気や公欠等やむを得ない欠席の際に困る（N=95）



④短期間に詰め込むため知識が身につけにくい（N=95）



3) クォーター制に関する自由記述

68名の学生から意見が提出された。これは全回答者95名のうち72%に相当する。誤字脱字のほか真意の不確かな意見もみられるものの、調査に真摯に回答した学生の問題意識が強く反映された貴重な情報と受け止め、原文のまま以下掲載する。

1. 全休が作りやすい
2. クォーターはテスト期間が Semester と違うから勉強しやすい。しかし、週2のため自分の取りたい授業によく被る。
3. 授業を組みにくい
4. 最初から制度整備されているなら良い制度だと思うが、途中から制度改革があり、とても不便だった。自分たちの代が試験的な制度導入の世代だった事は否めないが、試験学習のための時間確保や、予習復習の時間確保の点では優れた制度であると思う。
5. 課題の多い講義が複数あるとゆとりがなくなる
6. 必修科目やゼミと総合科目が被った時は、前期と後期

どちらもその時間帯に総合科目が取れないので時間割を組むのに少し苦労しました。試験期間が2日ありますが、その日より前に試験をしてしまうことが多かったので、あまり必要性を感じませんでした。

7. とにかく総合が取りにくい。どちらも取らないといけないのにどちらかに選択しなければならない。
8. インフルエンザや怪我など休む期間が長いと出席に影響が大きい。
9. もっと早くクォーター制になることを告知していればここまで困ることはなかったと思う。履修登録の際、とてもわかりにくいので可能であればクォーター制を利用した科目を減らしてほしい。
10. 総合科目のために3年次から取れる専門科目を取れなくなるのは困る。学校まで片道2時間ほどかかるので、クォーターの1限分のためだけに学校に来るのは大変。
11. 短期間で単位を取得できるので気持ち的には楽。期末期間にテストが集中しないのも良い。総合科目を1年次にあまり履修しなかったため、3年の履修を決める際とりたい専門科目と総合科目が被ることが多くとても困った。結果興味のある講義の履修を断念することもあった。
12. 週2で授業をするためその2つの曜日に Semester 科目でとりたいものがあつたのにとれなかった。第3クォーターでとつても第4クォーターでとりたいものがなかったためその2つの曜日の Semester でとりたい授業をとつとけば4単位とれたのに、と思わざるを得ない。本当に履修したいものを総合科目をとらなければいけないという理由でとれないということがあつた。
13. 時間割組みにくかつた、取りたい授業が被つて困つた
14. 必修科目とクォーター科目が被つていて総合科目が取れない。クォーター制度はやめてほしい。留学しない人の方が多いのに留学する人に合わせて制度を作つた意味がわからない
15. 入学1年後にいきなりクォーター制になって時間割が組めなくて切羽詰まっています。聞いてないです。クォーター制のせいで卒業が危ういです。
16. メリットは前半クォーターは試験日がずれるので、勉強しやすい。デメリットは、1つ目に、急な方針変更、その前に詳しい説明がないことから2年間の授業の取り方がすごく影響される。クォーターがよく理解できないうちに申請期間がはじまり、今後の状況を踏まえると今は総合を集中的に取らなければいけないなど、総合と、専門のバランスが崩れる。取りたい科目も取れない状態にもなる。また、週に2日となれば予習復習は難しい。ただの事務的作業になりかねない。2つ目に総合の授業と専門のバランスから外部の総合振替制度を使わなけ

ればならなくなる。周りでは片町のほうに行っている学生は多い。私は振替制度を利用したかったが、家から片町までの交通が不便で、大学が終わった後となると非常に不便であった。そのためむりやり入れる形で総合をとった。

17. 特になし
18. 他の履修したい科目と被っていたことが以前ありその科目を履修できなかった。
19. 総合科目の履修が難しかった。
20. テスト勉強しやすい点は良いが、専門科目が履修しづらい。
21. CDP(公務員コース)を受講していると、3年生になって総合科目が取りづらくなってしまった。2年生のうち何らかの対応をしていただければありがたかったと思う。人文学部のためにクォーター制を導入したのはいいが、経済学部の学生からしてみれば大迷惑だ!
22. ・Q1とQ3では、セメスターと試験が被らなくてよいから試験勉強しやすいことが、メリット。また、語学系だと短期集中で忘れにくい。・逆にQ2とQ4ではセメスターとテスト期間が同じになるから、メリットにはならない。また、取りたい科目がどちらかの曜日で重なった場合取れない単位をどこでフォローするか考えないといけないことがデメリット。この際に、翌年の時間割りが分からない為、そこでも重なる可能性がある。なるべく早く時間割りを知りたい。
23. メリット・語学を学ぶ上ではある程度頻繁にその言語に触れる必要があると思うので、語学系科目をクォーター制にするメリットはあると思う。デメリット・語学系以外の総合科目をクォーター制にするメリットがわからない・クォーター制とセメスター制の混合で、どちらも授業が取りにくい・クォーター制の授業期間とセメスター制の定期試験期間、クォーター制の定期試験期間とセメスター制の授業期間というふうに重なるので、予定がわかりにくい・取りたいクォーター科目の時限が週2時限のうち1時限でも、取りたいセメスター科目と被ると、どちらかを諦めなければならないことが多い・私たちの学年ではないが、クォーター制が最初から導入されている学年では1年生のうちに必修の英語科目が全て終わってしまうというのはどうなのだろうという疑問がある・授業調整日が多い・クォーター制を導入したのは海外留学しやすくするため、また留学生を受け入れやすくするためという目的の1つがあると聞いたが、専門科目にセメスター制を導入している時点で授業が終わる時期は変わらないので、留学のしやすさというのは変わらない・全てクォーター制、全てセメスター制のどちらかにしたらどうだろうと思う(問題点はあ

るかもしれないので、そこは検証願いたいです。)

24. 長期期間が短くなった。
25. クォーター制は抽選なので、単位が足りていないのに落ちてしまうと後々大変になってくるので抽選を止めてほしい
26. ちょうどそのクォーター授業の曜限が空いていたなら、短時間で科目が取れるのは良いと思う。しかし私の場合は、週に2回授業があるため片方が別授業と被り受講できない、という事が多々あった。またクォーター授業を取ると前・後期の途中で時間割が変わるので、生活状況も変わり少し大変だった。
27. 週に2回あると、どうしてもその科目と被る時間の授業が履修しづらい。
28. クォーター制度のメリットは、テストが分散されて勉強のしやすさがあることです。デメリットは、クォーターをとると、取りたい専門科目があったとしてもとれないことです。ゼミなどすでに曜日が決まっている場合は完全に断念せざるおえない状況になってしまいます。また、時間割を作る際になるべく空きコマを作らないようにしたいと考える中で、週2回授業があるとなると作りにくい。また、週2回の授業はセミスター科目の半分の期間で終わるけれど、レポート提出など期間が短すぎたり、詰め込まれすぎな感じはあると感じます。また、クォーター科目のテスト期間として設けられている期間にテストをしている科目は実際には少ないと感じています。その期間は実際に必要なのかという疑問もあります。
29. メリット 短い期間で勉強するため知識がつきやすい
デメリット セメスターで取りたいものと時間割被るので組みにくい
30. 週に2回だと、取りたい専門科目と被ってしまうことがよくあるので困ることがある。
31. 取りたい総合科目や専門科目と被ることが多い
32. メリットは総合科目が1年間で多く取れるようになったことと、テスト期間クォーターとセメスターはズレるので勉強しやすくなったことです。デメリットとしては、受ける人数が集中してしまう科目がある。そのため、お金を払って鳴和台駐車場を借りているのに、その授業の時間に集中して生徒が学校に来てしまうため、鳴和台駐車場に停めることができず、授業に出れないもしくは遅れてしまうことがしばしばありました。
33. 総合科目がクォーターになったので取らざるを得ない状況でそれを取ると履修したかった専門科目が取れなくなった。
34. 時間割をたてにくい。
35. クォーター制だと就活が6月あたりに終わっても2QP

- から出席できるので助かります。また4年生3年生を優先して抽選してほしいです。
36. セメスターと混合しているのですごくやりづらいです。セメスターのみでよかったです。
 37. 語学系は毎日やるのが1番の上達法だと考えるので、クォーターの方が身につけやすいと思う。復習をしないとすぐ次の授業が来るので、内容が難しい授業は置いていかれる。
 38. クォーターのデメリットは受けたい授業がたくさん重なってしまうことがある
 39. 時間割が組みにくくなってしまった。総合科目が少ない人達が大変そうだった。クォーターによって半期分で終わるがそこに空きコマが出来てしまい、無駄な時間を過ごしている気がした。
 40. 総合科目が少ない
 41. メリット：単位を取得しやすい デメリット：セメスターごとに生活リズムが変化する（前期に履修して後期に履修しなかった場合）
 42. クォーター制反対派 週に2回あるため、もし1週間（クォーター科目の曜日を）欠席したらとても致命傷を負う。
 43. 長期間休みが短くなること
 44. メリットとして、テストが分散されるので勉強が楽であること デメリットとして、セメスターとの調整が分かりづらく面倒であることがあげられます
 45. 履修登録するのが大変だった
 46. 総合科目と専門科目が被って授業を組むのが難しい
 47. (デメリット) もともと科目数が少ない総合科目のなかから単位取得のために総合科目と専門科目が重なることでさらに選択肢を絞られることになるので、卒業要件を満たすことが厳しくなったのは事実だと思う。そのため、入学年度のカリキュラムのままでクォーター制度とセメスター制度で分けたほうがこのような問題は発生しにくいのではないかと思う。
 48. メリットとしてはクォーターより早めにテストを受けられるがセメスターと被った場合にテストの量が多すぎる
 49. メリットは、期末テストの時期がセメスターとずれるので負担が少なくなること。デメリットは、一限のクォーターを選択するとその期間は朝が辛くなること
 50. 一週間に2回同じ授業があると、自分の取りたい専門科目と総合科目が被って取れる科目が制限される。
 51. メリットは短期間で終了するところのみ。デメリットは他の取りたい授業が取れなくなりやすい、セメスターに比べ、自由な時間が確保しにくくなる。
 52. 専門科目とクォータ科目が被ると困る
 53. 総合科目が取りにくい
 54. メリットは試験期間が年間で多くなることによって、学生の授業以外での勉強時間が多くなる
 55. 週に二回あるため前回の授業をなんとなく覚えている
 56. 時間割が組みにくい。隙間が多くなる。
 57. 春休みの期間が短くなるのがクォーター制のデメリットだと思う。
 58. 履修人数が限られている総合科目で抽選から外れることで、履修できずに総合の単位が不足し、自分の思ったように履修登録が、できずに受けたい科目が受けられないので改善してほしい。
 59. デメリット 週に2回あるため、どちらか片方で取りたかった科目が被る
 60. メリット 単位習得が早い
 61. 1Q3Qは、セメスターの試験と被らなくて安心だが、2Q4Qになると、試験期間中に授業やレポートが出されるので、専門科目などの単位が危うくなり怖い。
 62. セメスター科目とクォーター科目が混在しているので、時間割が作りづらい。どちらかに統一した方が良いと思う。
 63. 総合科目とれない。抽選やめて欲しい
 64. 同じ時間にある専門科目の授業を取ると、クォーター科目の取りたい科目が受講できないので、改善してほしいです。
 65. デメリットが2点あります。？。そもそもクォーター制にする意義が不明な点（意義やその根拠を示してほしい）？。セメスター制とクォーター制が混在している点（どちらかに揃えてほしい）
 66. デメリット 一部科目が抽選形式なので、抽選結果が発表されるまで時間割を確定できないこと。上位学年であっても抽選漏れが起きる可能性があるため、年単位での計画を組むことが困難なこと（例：1年間で総合科目8単位を各クォーター2単位ずつで取ろうとした場合、どこかで抽選漏れが起きると、その時点で年間の履修登録計画が大幅に狂ってしまう）メリット：時間割次第ではあるが、従来の制度（通年）より1年間にも多くの総合科目が取得できること。
 67. メリットは単位取得が早いので効率的に単位取得ができる。デメリットとしては冬場1限目は交通面の遅延的に欠席、遅刻がたまりやすい。すこし長めの休みを取ってしまうとついていけない&レジュメやノートの取り忘れによりかなりキツイ展開になってくる&欠席日数がすぐに溜まる。がある。デメリットに関しては自己責任な面が非常に多いのであまり参考にはならないと思いますすみません。
 68. メリットとしては短期間で単位が取れるのはありがたい

いと感じる。デメリットとしては現3年生としては卒業に足りない分の総合科目がクォーター別に指定されるため教科の幅が少なくなり履修しづらくなった。2年生以下は中途半端にクォーター制にしたことで今後の履修がしづらくなった。自分是对策として教授の負担は大きくなるが、学生としては総合・専門に関わらずクォーター制にすることで短期集中で単位が取れる上にまとまった休暇も確保出来ると思う。もう1つの案としては現状を維持したまま、1年次には総合をメインに2年次には専門をメインに3年次には過去2年の足りない分を補う形でというように大学側がテンプレートとなるような履修の一例を示すことで学生も焦ることなく計画的に単位取得が出来ると思う。

(以上、原文ママ)

4. 分析・考察

本アンケート調査は、他学部におけるクォーター制の導入に連動する形でクォーター科目を履修する必要が生じた経済学部学生、中でも履修環境の激変による影響が最も大きいと考えられた3年次の学生を対象として実施した。回収率の低さは、期末試験に近接した時期的要因が主因と考えられる。一方で、属性設問の結果が示すとおり、回答者の多くは単位取得が順調な学生であること、全回答者95名のうち72%に相当する68名が自由記述欄にも書き込みを行っていたことから、クォーター制導入がもたらしたインパクトの大きさが窺える。

(1) 設問に対する回答

本調査では、長時間かけて文献を大量に読み思索することが要求される科目と、語学やスキル系科目とでは、クォーター制に対する適性に違いがあるとする考え方¹¹を参考として、「語学系科目」と「語学系以外の科目」を区別した上で同じ設問を用意し、学生の意見を問うこととした。

まず、①クォーター制のもとで試験時期が Semester 科目と分散されることにより試験勉強がしやすいかどうかという設問については、アンケート調査の実施前に行ったプレ調査(学生に対するインタビュー調査)の段階で学生の一部から指摘があったことを踏まえて設定したものである。語学系科目、語学系以外の科目いずれにおいても「まあそう思う」とした回答が相対的に多くみられたものの、

賛否が分散する傾向が見受けられた。自由記述でも学生が指摘しているように、第二、第四クォーターの試験期間は Semester 制と重複するため分散化が図られないことも一因であろう。なお、試験勉強がしやすいという学生の認識が実際の学習効果として発揮されるかどうかについては別途の検証が必要である。

②時間割で同じ曜限に入っている専門科目を履修できないことの問題は、プレ調査でも多数の学生から指摘を受けており、アンケート調査でも語学系科目、語学系以外の科目の両方で同様の結果となった。科目を履修すれば同一曜限の別の科目を履修できなくなるのは当然であるが、卒業要件の下限である124単位のうち52単位は共通教育科目(=クォーター制、週2回開講)から、72単位については専門科目(=Semester制、週1回開講)から取得しなければならない本学経済学部のシステム¹²では、例えば第一クォーターで週2回開講のクォーター科目を履修すれば、たとえ第二クォーターで当該曜限のクォーター科目を履修登録しなかったとしても、当該曜限に開講される専門科目(Semester科目)についてはすべて履修できないこととなる。今回の学生アンケート調査の自由記述において、共通教育科目の数が少ないという意見や、必修科目・ゼミ等との曜限重複に関する指摘もなされており(後述)、本来「柔軟な履修計画が可能になる」ことをメリットとするはずのクォーター制について、他の適切な制度改革を伴わなければむしろ学生に履修計画の硬直化をもたらすおそれもあるものと懸念される。

③「病気や公欠等やむを得ない欠席の際に困る」かどうかという設問は、ロチェスター工科大学(Rochester Institute of Technology, RIT)のプロボーストを務める Jeremy Haefner 氏の意見を踏まえて設定したものである。同氏は、クォーター制にもメリットが存することを認めつつも、何らかの理由で学生が欠席せざるを得なくなった場合にクォーター制では学習の遅れを取り戻すことが極めて困難である("If a student gets sick and has to miss a class in a quarter system, it's very, very challenging for that student to catch up")一方で、Semester制ではその問題は若干緩和される("In a semester system, it's a little more forgiving.")としている¹³。

本調査の結果、語学系科目、語学系以外の科目いずれでもこの問題を懸念する学生の声が大勢を占めた。進行の早いクォーター制では学習の遅れを取り戻すことが(Semester

11 田中(2015) p.17.

12 今回の学生アンケート調査の実施主体であるFD分科会は、2018年2月、本学の全体FD会で、経済学部の卒業要件である「共通教育科目52単位」について、引下げの方向で見直すべきとする提言を行っている。この問題については本学の教育理念やポリシーと整合した専門教育の充実という視点から別途検討が必要である。

13 Smith(2012).

ター制に比して) 困難であることは自明である。クォーター制に移行している一部の大学のように、交通至便な大都市圏に立地する大学であれば格別、自然災害あるいはそれに伴う公共交通の乱れ等が生じやすい地方部の大学では、自由記述でも指摘されているように、本人の責めによる理由なくして欠席が発生する蓋然性も高いことが懸念される。

④「短期間に詰め込むため知識が身につみにくい」については、語学系科目、語学系以外の科目いずれも回答が分散する傾向がみられた。本人次第という面もあるが、大学としても、クォーター制の導入に合わせて教員が様々な教育手法を柔軟に駆使することで成果を挙げるための授業上の工夫について組織的に支援することが求められるといえよう。既述のとおり、長時間かけて文献を大量に読み思索することが要求される科目等、クォーター制のもとで授業に創意工夫を凝らしてもセメスター制の方が学習効果が高いと想定される場合についてはセメスター制で開講することにも十分な合理性があると考えられる。

(2) 自由記述

前述のとおり、回答者95名のうち72%に相当する68名が自由記述欄にも意見等を記入していた。株式会社SCREENアドバンストシステムソリューションズが提供する計量テキスト分析ツール「文錦™ クレンジング for KH Coder」を活用し、自由記述に頻出する単語を抽出した結果、以下のとおりとなった。

抽出語	出現回数
科目	69
総合	34
授業	31
取る	28
期間	22
履修	21
デメリット	19
メリット	19
被る	19
思う	18
専門	18
単位	17
多い	14
取れる	13
制度	13
テスト	12
試験	12
時間	12
時間割	12
週	12

抽選	9
勉強	9
組む	8
取得	7
困る	6
作る	6
終わる	6
集中	6
少ない	6
場合	6
クォーター	6

ここでは出現回数6回以上の語に限って掲載した。さらに厳密なコーディングを行うことで出現回数の若干の増減はあり得るが、ここでは出現回数の多寡ではなく当該語句がどのような文脈で使用されているかに主眼を置き、これらの語のうち、特に学生の意識が反映された意味づけがなされている可能性を考慮して「被る」の語に注目した。

「被る」の語が変化活用も含めて出現した記述内容をさらに文脈別に分析すると、概ね以下の3パターンに大別された。

- a: 「クォーター制とセメスター制の試験が『被る』』という文脈で使用されたケース
- b: 「(全般的に) 他の科目と曜限が『被る』』という文脈で使用されたケース
- c: 「必修科目と曜限が『被る』』という文脈で使用されたケース

前述のとおり「a」については一義的に問題視することは困難であると考えられる一方で「c」、及び一定程度で「b」に関しては、本来「柔軟な履修計画が可能になる」ことをメリットとするはずのクォーター制について、他の適切な制度改革を伴わなければむしろ学生に履修計画の硬直化をもたらすおそれもあることに十分な留意が必要である。

5. 限界と今後の課題

本研究で言及した学生アンケート調査は、FD活動としての時間的制約のもとで行われた点に留意する必要がある。期末試験にも近接した時期での調査実施であったことから、回答する学生の便宜にも配慮し、設問数についても限定せざるを得なかった。当該アンケート調査で得られた結果(リッカートの5段階評価)についてはノンパラメトリックな手法、もしくは一定の前提条件を付した上でパラメトリックな手法により分析することも検討したが、本研究ではむしろ当該調査の自由記述で得られた情報の有用性に注目した。この学生アンケート調査は本学のクォーター

制をめぐる課題把握の一助となった一方、学事暦の抜本的見直しという制度改変のマグニチュードの大きさ、さらにはそれに伴い学生全体の学修環境の視点に立脚したきめ細かな制度改善の必要性を考慮すれば、今後は悉皆調査やインタビュー調査等を通じてよりきめ細かに課題を抽出する調査方法が求められよう。

制度の運用面では、本研究で取り上げた学生アンケート調査において、学生からクォーター制導入についての事前説明や激変緩和措置が不十分であるという指摘があったことは遺憾であり、本学の今後の制度改変時に活かすべき教訓といえよう。例えば一橋大学では、平成29年度からのクォーター制の導入に伴いカリキュラムについても大幅に変更されることを見据え、社会学部の学生、社会学部の授業を受講した他学部の学生、次年度に社会学部の授業を履修予定の他学部の学生を対象に、説明会を2017年1月に開催することを発表し、「単位の取得や履修全般に関して質問や不安などがある場合には説明会に参加」¹⁴するよう促している。

最後に、当該調査において寄せられた経済学部の学生の声のほか、他大学におけるクォーター制の導入に係る「先進事例」を踏まえ、本学のクォーター制の導入に伴う今後の検討課題として以下の2点を指摘しておきたい。

(1) 授業運営の弾力化とICT活用

明治大学では2017年度春学期から、1コマ90分7講時の授業時間割を1コマ100分6講時の授業時間割に変更し、各学期の授業実施週数を従前の15週から14週に短縮するとともに、各学期14週を前半と後半の7週ずつに区分し、14週にわたるセメスター授業に加えて一部の授業を7週で完結することができる仕組みを導入している。単に、従前のセメスター制に新たに4学期制を上乗せしたということではなく、1つの授業を基本100分で行い、その100分の授業を50分ごとのa、bの2つの単位（モジュール）に区分けすることで、例えば前半のaモジュールで講義を行い、後半のbモジュールでディスカッションや確認テストを行うといった授業の切り替えに使う、教育効果の観点から50分単位での授業を週2回実施して1つの授業とする、といった運用が可能とされている。また、「モジュール化」を通じ、通常の6時制限に加えて早朝の時間にモーニングモジュール（Mm）、昼休みの時間にランチモジュール（Lm）、6時限終了後の時間帯にナイトモジュール（Nm）という3

つの時間割区分を設けることにより、Mmは予備的時間割として、Lmは昼休みとして、Nmは社会人対応の夜間時差時間割として運用することを原則としつつも、必要に応じて補講への活用や集中講義の実施にも活用するなど、補助的モジュールとして利用することとされている。このような仕組みの導入により、「授業設計や教授方法にアクティブ・ラーニング等の手法を用いた教育効果を高めるための工夫を取り入れやすくなる」¹⁵とともに、「この新授業時間割の様々な活用により学生にとってさらに魅力ある授業を展開し、本学の教育力をより一層高め」¹⁶としている。

このような抜本的な見直しの実効性については慎重な検討が必要であるが、集中的な学修、柔軟な履修計画等を通じてクォーター制のメリットを遺憾なく発揮するためには、科目の特性に対応した弾力性の高い授業運営の改善を図る必要があることは明らかである。むしろそのような授業改善は担当教員に一任されるのではなく組織として支援していくべきものであろう。同様に、クォーター制のメリットとして指摘されるインターンシップ等への参加についても、それが大学における学修として望ましいという認識の上でクォーター制への移行の判断がなされているのであれば、インターンシップの意義を正しく評価した上で単位認定を進めていく必要がある。

早稲田大学理事（教務部門総括）・政治経済学術院教授の田中愛治氏は、クォーター制の導入に伴う負担面とそれを緩和するための方策について以下のように指摘している¹⁷。

…多分一番大変なところは、科目登録と成績をつけるということだと思います。（中略）今我々が考えていますのは、初回の授業をオンデマンドにすることです。そうしますとお試しで、例えば同じ時間帯に2つ3つの科目を取りたいんだけど、一遍には体が1つしかないのを見られないというときに、オンデマンドで内容を見ておいて、それを3つのうちからどれを取るかを選んで履修をすれば、1週目は授業が自宅で取れるわけですね。そうすると、1週間間があけられるので、8週目の終わりとして次の6月のところで1週間間があけられるだろうと考えています。そこに間があいていきますと、そこで成績をつけるとか、科目登録ということが十分できるようになると思っています。

ICTの有効活用の必要性は大学学務全般に共通することであるが、クォーター制の導入に伴い教職員、学生の双方

14 一橋大学（2017）

15 明治大学（2016）

16 同上

17 文部科学省（2014b）

に発生する様々な負担が発生していることは事実であり、その緩和と教育環境の改善の視点から、授業運営の改善の一環としてICTの活用についても本格的な検討が進められるべきであろう。

(2) 実効性ある国際化戦略の確立

立教大学は2014年春、創立150周年にあたる2024年を目標年度として、以下の4つの具体的目標を掲げた国際化戦略「Rikkyo Global 24」を策定している。

- (1) 海外への学生派遣の拡大（学生の海外経験率を5年後50%、10年後100%に）
- (2) 外国人留学生の受け入れ拡大（留学生数を5年後1,000人、10年後2,000人に）
- (3) 教育・研究環境の整備（海外協定大学数を5年後150大学、10年後200大学に）
- (4) 国際化推進ガバナンスの強化（外国人教員比率を10年

後20%に）

クォーター制についても「国際化を推進するための環境整備の柱」と位置づけ、「学生が海外に留学しやすくなる」「学期制の異なる海外からも留学生や教員をスムーズに受け入れることができる」¹⁸として、留学プログラムの充実、英語で受講できる科目の拡充、英語による学位授与コースの開設、海外協定大学の拡充等の具体的な施策とあわせて国際化を加速することとしている。

本学におけるクォーター制の導入についても、立教大学と同様に国際化の推進に重きを置くのであれば、留学や海外研修等の機会の創出に向け、夏季集中型講義や語学研修プログラム等のさらなる充実に向けた総合的な取組みが不可欠である。ここでも一部の教職員による自発的な取組みに依存するのではなく、実施体制や予算措置等も含めた実効性ある組織的対応が求められるよう。

(了)

参考文献

- Maynard, Lyla S. (1984) "Student perceptions of the learning environment under a quarter system at two community colleges". Retrospective Theses and Dissertations. <http://lib.dr.iastate.edu/rtd/9007> (最終閲覧日：2018年5月1日)
- Smith, Mitch (2012) "Strength in Numbers" Inside Higher Ed, February 7, 2012 <https://www.insidehighered.com/news/2012/02/07/colleges-increasingly-switching-quarters-semesters> (最終閲覧日：2018年5月1日)
- University of Cincinnati (2012) "Semester Conversion Guide" August 27, 2012. <http://www.uc.edu/content/dam/uc/conversion/docs/faqs/guide.pdf> (最終閲覧日：2018年5月1日)
- Woodhall, Maureen. (2004) "Cost-benefit analysis in educational planning." UNESCO: International Institute for Educational Planning, Fourth edition.
- 大阪大学「平成29年度からの教育改革について」
http://www.osaka-u.ac.jp/ja/education/academic_reform/academic_calendar (最終閲覧日：2018年4月3日)
- 金星星稜大学 (2017) 「平成28年度自己点検評価書」
<http://www.seiryu-u.ac.jp/u/outline/lsl5ls000003vri-att/rbjedl00000jbc67.pdf> (最終閲覧日：2018年4月3日)
- 金星星稜大学人文学部HP「人文学部国際文化学科 三つの方針」
http://www.seiryu-u.ac.jp/u/faculty/humanities/inter_02.html (最終閲覧日：2018年4月3日)
- 田中愛治 (2012) 「秋入学と国際化の実現にはクォーター制の導入が必須」学研・進学情報2012年9月号, pp.2-5.
<http://www.gakuryoku.gakken.co.jp/pdf/articles/2012/8/P2-5.pdf> (最終閲覧日：2018年4月3日)
- 田中愛治 (2014) 「早稲田大学における4学期制 (Quarter制) 導入の狙いと今後の展望」文部科学省「学事暦の多様化とギャップタームに関する検討会議」提出資料http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/57/siryu/_icsFiles/afied-file/2014/04/08/1346418_01.pdf (最終閲覧日：2018年4月3日)
- 田中愛治 (2015) 「早稲田大学における4学期制 (Quarter制) 導入の背景と目的」大阪市立大学『大学教育』第13巻第1号, pp.11-24.
<http://dlistv03.media.osaka-cu.ac.jp/contents/osakacu/kiyo/DBn0130103.pdf> (最終閲覧日：2018年4月3日)
- 仲井邦佳 (2016) 「大学の単位制度と学年暦 ―「1単位=45時間」と「1科目=1350分説 (15週論)―」立命館産業社会論集第51巻第4号, pp.1-11
- 南山大学 (2015) 「2017年度クォーター制導入」南山プレティン194号https://www.nanzan-u.ac.jp/Topics/194/194_02.html(最終閲覧日：2018年5月1日)
- 一橋大学社会学部 (2017) 「カリキュラム変更に関する説明会のお知らせ」<http://www.soc.hit-u.ac.jp/info/student/?id=466> (最終閲覧日：2018年5月1日)
- 明治大学 (2016) 「2017年度からの本学学年暦及び授業時間割の変更について (お知らせ)」<https://www.meiji.ac.jp/koho/news/2016/6t5h7p00000l87h.html> (最終閲覧日：2018年5月1日)

文部科学省（2012）「大学設置基準等を改正する省令案について」平成24年度大学設置等に関する事務担当者説明会資料（その2）

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ninka/1331390.htm（最終閲覧日：2018年5月1日）

文部科学省（2014a）「学事暦の多様化とギャップイヤーを活用した学外学修プログラムの推進に向けて」学事暦の多様化とギャップタームに関する検討会議資料

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/57/toushin/_icsFiles/afield-file/2014/06/02/1348334_1.pdf（最終閲覧日：2018年5月1日）

文部科学省（2014b）「学事暦の多様化とギャップタームに関する検討会議（第4回）議事録」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/57/gijiroku/1347494.htm（最終閲覧日：2018年5月1日）

立教大学（2014）「全学部で4学期制導入を決定 2015年度に試行，2016年度の本格導入で，国際化を加速」

<http://www.rikkyo.ac.jp/news/2014/05/14616.html>（最終閲覧日：2018年5月1日）